

アが開いた音を茶の間にいた家内と娘が聞いている。

アが聞いた音を茶の間にいた家内と娘が聞いている。吹き抜けの茶の間は2階にある。1階には仏間があり、書斎と床の間のある和室は3階である。妙な予感がして帰路に就いた。家に帰ると、家内が「さつき、だれか来たのよね」と言う。

アが聞いた音を茶の間にいた家内と娘が聞いている。吹き抜けの茶の間は2階にある。1階には仏間があり、書斎と床の間のある和室は3階である。妙な予感がして帰路に就いた。家に帰ると、家内が「さつき、だれか来たのよね」と言う。

アが聞いた音を茶の間にいた家内と娘が聞いている。吹き抜けの茶の間は2階にある。1階には仏間があり、書斎と床の間のある和室は3階である。妙な予感がして帰路に就いた。家に帰ると、家内が「さつき、だれか来たのよね」と言う。

握って握りしめて

父が亡くなって19年がたつ。亡くなる2日前に妙な体験をした。うそだと笑われるかもしれない。その日、平成10(1998)年11月21日、わたしは川崎市の高校演劇の審査員を頼まれ、その帰り路、登戸駅の駅前の居酒屋で先生方と慰勞の酒を飲んで、いた。トイレのドアを開けると、薄暗い影が便器のうえに蹲っている。だれとはわからなかったが、そのままドアを閉めていた。同時刻、わが家では玄関のド

わたしは玄関のチャイムを鳴らすのを習慣としている。わたしの帰りを待っていたように、松浦の友人吉本務氏から電話があった。吉本さんは市民病院に勤めていて、父が入院していた。吉本さんの電話は父が危篤であることを告げた。「す

と書いたのだと解釈して「任せとかんや」と言ったのはすでに書いた。父は「生まれ故郷の隠岐を頼む」と書いたのである。いま、父も母も、父の生まれ故郷の隠岐の島の岡部の墓に眠っている。母もあれほど嫌っていた岡部家の墓に眠っている。

母の臨終は静かだった。すでに弟の次郎は亡くなっていた。次郎は本家の横地家の養子となり横地を名乗っていた。「養子に行きたくない」と次郎は泣いてわたしに訴えた。母からも「次郎を養子にしたくない」と長文の手紙が届いた。しかし、次郎は横

地家の養子になった。横地家を巡って、父と姉妹との争いや駆け引きがあり、次郎は父に従うしかなかったのである。おとなしい父がどうして横地家にあれほど意地になったのかは、生前の父が「俺は横地家で育ったごたるもん」の言葉で推察するしかない。隠岐の横地家と岡部家は隣り合わせにある。「小糠三合あれば養子にやるな」といった言葉もある。わたしも「親父に従え」と次郎には冷たくあたった。東京で演劇を始めた時代である。それどころではなかった。母には次郎が亡くなったことは知らせなかった。母もある日を境に次郎のことはばたりと口にしなくなった。わたしや親戚の言動でなにか悟ったのかもわからない。「あの世で親父の待つとるたい」。わたしの言葉に母は微笑んでいた。親戚の手を握ったままの臨終であった。「握って握りしめて」の言葉がぴつたりであった。母は次郎の手を握っていたつもりだったかもしれない。